

とんぼはら村からワチニシコ

吉本直志郎／作
関屋敏隆／絵



とんぼら村からワチニシ

吉本直志郎／作

関屋敏隆／絵



児童文学創作シリーズ

とんばら村からワチニンコ

1986年4月14日 初版第1刷発行

定価980円

著 者 吉本直志郎

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21(郵便番号112)

電話 東京03(945)1111(大代表)

N.D.C.913 182p 22cm

印刷所 豊国印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©Naosirô Yosimoto 1986 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえます。

ISBN4-06-119092-X (0) (児企)

ら村から ワチニンコ



もぐじ

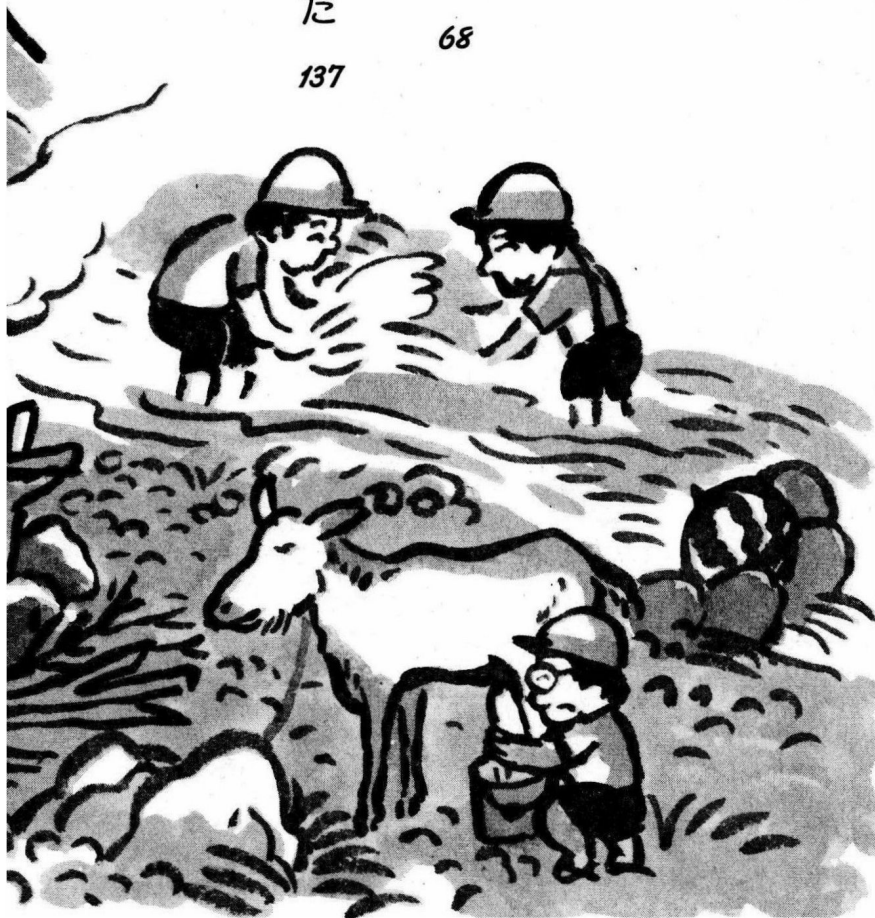
くにさだちゅうじ
国定忠治がやってきた 4

びりんご沢ざわの日曜日にちようび 32

おばけもびつくり肝きんだめし 68

まつたけどろぼうつつかまえた 137

あとがき 180





くにさだちゅうじ 国定忠治がやってきた

1

こないだ村役場の掲示板に、頼原村の現在の人口は千一人だとかいてあった。つまり、千人とひとりだということだ。

そこで、榎本健太郎たち頼原小学校笹賀分校の子らは、学校の帰り道、そのひとりというのがいったいだれかということ、ちよつともめた。

「きまつとるじゃないか。そのひとりはおれじゃない。そんでよう、あとのみんなは千人のうちじゃない。」

と、まっさきにいつのつたのは、健太郎とおんなじ五年生で、坪井林業の三男坊の坪井誠治だ。



「じやつてよう、おれがおらんかったら、村の人口はちよつきり千人じやもん。そんならどう考えても、たしかにそのひとりはおれじやないか。」

すかさず、三年生の坂本悦子が、

「なーんね、なんね。誠治のめだちたがりや。そんなりくつはとおらんよ。うちがおらんかったも、村の人口はちよつきり千人になるじやないの。」

ばかりでかい声で、口をとんがらかせていいかえした。

そしたら六年生のかよ子が、

「そりやあたしに誠治が欠けても悦ちゃんか欠けても千人じやけど、うちか勝彦かエノケンのだれが欠けても、村の人口はちよつきり千人になるんよ。」

と、ここにいる五人みんなの名前をあげながらいつて、

「じゃけえ、だれがそのひとりときまったもんじやないんよ。」

という結論をだした。つづいて、おなじく六年生の林勝彦も、

「そのとおり。村のだれがひとり欠けても千人なのだ。誠治であろうと、悦子であろうと、エノケンであろうと、はたまただれであろうと、それぞれみんなが千一人のそのひとりじやし、千人のうちなのだ。」

と、あいづちをいれた。

エノケンというのは、榎本健太郎のことである。なんでも、村のおとなたちがいうことには、むかし、榎本健一というおもしろい役者がいて、そいつがエノケンとよばれてたそうだと。それで、健太郎もよく似た名前なもんだから、いつかエノケンというのが通じ名になってしまったというわけだ。けど、その役者はえらい人気もಂಡったというから、健太郎はエノケンとよばれてもべつにわるい気はしていない。

エノケンという人がラジオや映画やしばいなんかにでてたころは、この榎原村の人口も五千人はいたというから、いまではずいぶんへったもんだ。

健太郎の兄ちゃんもそうだけど、わかい人らのほとんどは、町にはたらく口をみつめて村をでていく。なにしろ村にはわかい人らがはたらけるような大きな会社も工場もないからだ。それから、榎原村ではたいていの家が農業と林業でくらしているけど、雪で仕事がなくなる冬はでかせぎにでていく人もいて、それで、そのまんま町にすみついて、村をはなれてしまう家族もいたりするのだ。

千一人のそのひとりは村長だという意見や、四月におつねばあちゃんとこでうまれた女の赤ちゃんだという意見もでたけど、ま、やっぱるかよ子や勝彦のいうとおりだろう。



いつだったか、健太郎らの分校の片山先生が話してくれたけど、町では、生徒の数だけでも千人をこえる小学校がざらにあるというからおどろきだ。

頓原村には、甲平、小畝原、東大畠、西大畠、上笹賀、下笹賀と、六つの地区がある。役場や農協や診療所なんかは、みんな村の中心地の甲平にかたまっている。頓原小学校も頓原中学校も甲平にある。けど、村のいちばん北の上笹賀の子らと、そのとなりの地区の下笹賀の子らだけは、頓原小学校笹賀分校にかよっている。一年生から六年生まであわせても三十六人しかない。笹賀の集落は下笹賀のほうが大きいから、健太郎ら上笹賀の子は、そのうちの十一人だけだった。そして先生は、ふとつちよじいさんの岡崎分校長と、めがねおばさんの片山先生のふたりつきりだ。年少組と年長組の二つの教室にわかれて、一、二、三年生が岡崎分校長にならつて、四、五、六年生が片山先生にならっている。

2

ところで、ぐるりを山にかこまれたこんな千人ぼっちの村に、ひとつだけ不似合いなものがある。それは、板かべづくりに黒い屋根がわらをのせた、かなりでっかいしばい小屋だ。村のまんなかへんを流れる川が笹賀のちよつと下流でふたつにわかれていて、そこに出会い橋という橋が

かかっている。小屋はその橋のたもとにある。

じつは、このしばい小屋は頓原東洋座といって、健太郎のおじいさんがこさえたものだ。小屋主の、その源助じいさんが生きてたころは、どこかの旅回りの一座をよんで毎月のようにしばいを打っていたという。けれども、村の人口が年ごとにへったり、仁越峠をこえたとなりの温泉町に映画館ができたり、テレビにおされたりして、小屋にしばいがかからなくなってもう十年以上もたつらしい。

そんなわけで、健太郎や誠治やかよ子らも、その小屋でしばいをみたことはいっぺんもなかった。健太郎らがうまれたときから、しばいなんかやってなかったんだから。

ところが、あと五日したら、十何年ぶりかでその頓原東洋座にしばいがかかることになったのである。そのいきさつはこうだ。

ひと月まえだったか、健太郎の父ちゃんが、

「いつまでもあのまんま小屋をほったらかしといてもしょうがないけえ、いつそ養鶏場に改造して、にわとりでも飼おうかのう。」

ふと思いついたみたいに、そんなことをいいだした。そしたら健太郎の母ちゃんも、

「うんうん、そりやええね。えらいよあんだ。えらいえらい。なかなかええことに気がつきん

さったね。ははは、そりやええねーえ。」

と、とたんに目をかがやかせ、

「にわとりならたまごをうんでくれるもんね。たまごは、まちがいなしにお金につながるもんね。じゃけど、がらんどどの小屋のまんまじゃあ、なんにもうんでくれんもん。そりやあぜひと、にわとりを飼うことにしましょう。」

ちよつとせきこんだような声になつて賛同した。

そこで健太郎の父ちゃんは村長さんのところにでかけ、養鶏業をはじめることについて相談をぶつた。村のものは、なにかあると、たいてい村長さんか永光寺のおしろうさんに意見をきいてみるのだ。

父ちゃんがその計画を話すと、村長さんは、

「なるほど、そりや名案じゃ。いささかだだっぴろうはあるが、まあ、あの小屋ならちよつと手をくわえるだけで養鶏場にうってつけよ。やりんさい、やりんさい。」

と、そぐさに賛成してくれた。

ところがそのあと、

「どっじゃ、榎本のとつつあん。養鶏場に改造するまえに、ひとつ、最後にもういっぺんあそこ

でしばいを打って、村のもんを樂しませてやっちゃあどうかの。すりゃあ、村のもんだけじゃなく、小屋主じやった源じいさんも草葉のかけでよろこぶでよう。」

健太郎の父ちゃんは、村長さんにそうもちかけられた。

「そんな……村長さん、だしぬけにそんなことをいわれても、しばいを打つとなりや、あれやこれや、その手はずもとのえにやならんし……よわかりますでよう。」

父ちゃんはしぶった。けど村長さんは、

「なんのなんの。いざとなりやあしばいをひとつ打つぐらい、たやすいことよ。」と、こともなげにいつて、

「田植えもすんで、梅雨もあけて、村のもんもほっとひと息ついとるときじゃ。ここで、むかしにぎおうた頓原東洋座にしばいをよんだなら、またとない慰勞じゃ。わしも力になるよ。」

えらくのり気になって、父ちゃんを説得した。

それでも健太郎の父ちゃんは、二、三日、決心がつかかねていたけど、

「ねえあんた。十何年もしずまりかえつとるあの小屋にしばいをよんだら、じいちゃんのええ供養にもなるよ。」

母ちゃんにそういわれて、とうとうその気になったのだった。

うわさを耳にして、あちこちから村のおじいさんおばあさんたちも健太郎の家にたずねてきた。川むこうの迫田のおじさんや谷岡のおばさんらまでが畑仕事の帰りにたちよったりして、健太郎の家のえんがわは、このところにぎやかだ。

「榎本の父ちゃんよう。わしら、楽しみにしてらよう。」

「ほんにまあ、思いがけんことで、よろこんでありますでよう。」
と、だれもかれもうれしそうだ。

「じゃがのう榎本の父ちゃん。いつじやったか、あんたとこの源じいさん、村のわかいむすめらの足もしばい小屋へむけさせにやなんというて、奥山歌劇団とかいうハイカラなおどりをつれもどったことがあるが、あんなのはいけんぞ。」

はるばる小畝原から弁当もちでやってきた三浦のおばあさんが注文をつけると、

「うんうん、あんなのはいけん。いけんいけん。」

と、糸井製材所の隠居じいさんもあいづちをいれて、

「O・K・Dとかいうて、名前だけはたいそうしやれたアメリカ語をつけとったが、まるたんぼうみたいな太い足をむきだしにした女どもが、一列になって、ドンバタ、ドンバタ、ゆかをふみならして帰りのつた。しかしあれは、やかましいばかりじゃったのう。わしゃも、おど



はどうでもようて、あの太い足をうちの丸鋸
で一本一本ひいたらさぞ気持ちよからうと、
そんなことを思うてたいくつをまぎらしたん
でよう。」

ずいぶんむかしのことだろうに、三浦のお
ばあさんも製材所のおじいさんもよくおぼえ
ていて、はたできいている健太郎も感心し
た。

「やっぱし、剣劇か人情劇がええのう。」

「ほんま、ほんま。」

「のう榎本のとつあんよ。忠臣蔵をつれて
きんさいや。それなら、わしもうれしいで
よう。」

悦子えつこんとこのじいちゃんがいうと、健太郎けんたろう
の父ちゃんとうは、

「ふはは、やーれやれ、そんな大じかけのしばいはとてもむりです。ま、なんとかみなさんのために、ええしばいをつれてきますよ。」

と、にがわらいしている。

いっぽう、健太郎の父ちゃんは、しばい小屋を養鶏場に改造してもらうべく、甲平の大工さんとこまでたのみにでかけた。そしたら、

「おいおい榎本のだんな。あの小屋のどこをどういじって改造せよというんじや。しばい小屋はしばい小屋。にわとり小屋はにわとり小屋。そりや、どっちも小屋にはちがいないが、どだいっくりがちがうでよ。」

と、大工さんにいわれてしまった。改造などできないという。

「なんとか、なりませんか。」

「ならんな。」

大工さんはあっさりいって、父ちゃんに説明してきかせた。

「ええかな榎本のだんな。あの小屋の柱を助けて、屋根もそのままにして、板かべだけとっぽろうて、かなあみをはったところを考えてみなれ。不細工このうえないものができるでよ。」

人はおろか、にわとりをねらってやってくるイタチまでがあきれてわらうような、おかしげな